様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０７２４８

研究課題名（和文）高等学校の英語教員支援のためのアクティブラーニング研修動画プログラムと指導案開発

研究課題名（英文）Development of Active Learning Teaching Program and Teaching Plan for Japanese High School EFL Teachers

研究代表者
生駒　万貴（Ikoma, Maki）

立命館大学・言語教育センター・嘱託講師

研究者番号：５０８０１８８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、大学英語教育におけるアクティブラーニング(AL)の指導実践を調査し、その分析から得られた指導の知見を高等学校の文脈において有効な形で提示することを目的とした。主な成果として、英語教育でAL型授業を実践する際の主要課題、その要因及び指導上の対策・工夫を、実践的観点から分析・整理できたこと、また得られた知見を指導プログラムに反映し、基礎部分を作成できたことが挙げられる。改良の余地がある箇所に継続的に取り組み、次年度以降の公表を目指したい。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の目的は、AL型英語教育に比較的実績のある大学英語教育の知見に基づいて高等学校の現状を改善することであり、本研究で得られた知見は今後の高大接続の在り方を考える上で重要な視点を提供すると考える。また、将来ALの指導実践を期待される教員養成課程の学生にとっても有益な知見となり得るため、本研究はその観点において教育的意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate the teaching strategies explored by Japanese university EFL teachers who had rich experiences of adopting Active Learning (AL). Based on the insights gained from the investigation, it further attempted to provide practical suggestions for Japanese high school EFL teachers to help address their specific concerns with AL in their teaching context. Findings of the study revealed several major difficulties associated with the implementation of AL in the Japanese EFL context, a number of factors affecting such difficulties as well as effective strategies for how teachers can overcome each difficulty in their classes. Based on these findings, the basis of an AL teaching program (website) for high school EFL teachers was made. As some sections of the site still need further improvement, I plan to continue to work on them.

研究分野：英語教育、アメリカ研究

キーワード：高等学校の英語教員　アクティブラーニング　大学英語教育　教員支援

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年「使える英語」を教えることが期待される高等学校の英語教育では、アクティブラーニング(松下, 2015; 溝上, 2014) (以降 AL)の手法を駆使し、生徒の自律的な思考力・発信力を育成できる指導者の養成が急務であるが、その効果的な指導法が十分共有されているとは言い難い。大人数のクラス編成、多様な教室環境や短い授業時間等、様々な制約を抱える高等学校の教育現場では、AL の具体的な指導法やその教育効果に対して疑問や戸惑いを感じる教員も未だ多く存在している。また、現場教員のための AL の周知の場、スキルアップの場として、近年教員研修の充実が図られているが、成長期にある高校生を授業以外の場面でもサポートする立場にいる現場教員は、日々の校務で多忙を極め、研修参加が困難な状況も存在している(文部科学省, 2014)。

研究代表者は高等学校での教職を経て、2015 年度から A 大学の AL 型英語プログラムに携わっており、本プログラムの受講生の多くが、AL の学習法を通じて自身のプロジェクトを進める過程で、自律した思考力・発信力を養っていると実感してきた。今後、様々な制約を抱える高等学校での AL 型英語教育の推進を考える上で、大学英語教育で実践されている指導法には、高等学校の文脈においても有効な指導の知見が多く蓄積されていると考えるに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、比較的 AL 型英語教育に実績のある、大学英語教育における AL の指導実践を量的・質的双方の観点から集約し、その分析から得られた指導の知見を高等学校の文脈において有効な形で提示することである。多忙を極める高等学校の英語教員の指導スキルの向上に貢献するため、研究開始当初は高等学校の文脈に適した AL の指導プログラム(指導案及び研修動画)を作成、オンラインで公開することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、大学英語教育における AL の指導実践を量的・質的双方の観点から集約し、その分析及び高等学校の英語教員へのヒアリングを基に、プログラムの具体的な構想作りに着手、試作した後完成に向けて改良を加えることとした。行った研究の概要は以下の通りである。

〔平成 29 年度〕

(1) AL の関連資料を収集し、本研究におけるデータ収集・分析方法を検討する作業を行った。その結果、AL の実践課題に焦点を置いた調査(調査 1)、各課題に対する指導上の対策・工夫に焦点を置いた調査(調査 2)を段階的に実施することとした。

(2) 大学で AL 型英語教育に携わる教員を中心に、調査 1(質問紙)を実施、その結果の分析を進めた。調査協力者は計 28 名であったが、うち 1 名の回答には無記入が複数含まれていたため、分析対象は計 27 名とした。

〔平成 30 年度〕

(3) 調査 1 の更なる分析、その結果を基にした追加的な聞き取り調査(調査 2: 半構造化インタビュー)を実施した。調査協力者は、主に大学英語教育で AL を実践する教員 5 名で、インタビュー時間は各 60-80 分程度であった。前年度の調査結果から抽出された実践上の課題を中心に、英語の授業で AL を実践する際、具体的にどのような場面で難しさや問題を感じたか、またど

のようにそれらを乗り越えてきたか、授業内外における具体的な対策や工夫等について、これまでの指導経験を振り返りながら共有してもらった。

(4) 調査 2 で得られたデータを書き起こし、AL の指導上の問題、その要因及び指導上の対策や工夫に着目しながら、質的分析を行った。

(5) 高等学校の文脈に適した指導プログラムの構想を練るため、高等学校での教職経験を持つ英語教員に対して内容や構成に関するヒアリングを行った。

(6) (5)を進める過程で、年度後半に当初の計画(指導案・研修動画作成)を再検討する必要が生じた。調査で得られた指導の知見(AL の実践課題や指導上の対策等)が指導領域別に整理されたウェブサイトを作成することが、現場教員にとって大きな支援になり得るという、新たな視点が得られたためである。計画の変更に伴い、ヒアリングや AL 関連学会への参加を通じて得たアイディアを組み入れながら、年度末にかけて調整を行った。

４．研究成果

本研究で得られた主な成果として、(1)英語教育において AL を実践する際の主要課題、(2)(1)の要因及び指導上の対策・工夫を、実践的観点から分析・理解できたことがまず挙げられる。

(1) 両調査の分析より、特に英語で話したり書いたりする言語活動(発表、ディスカッション、ピアライティング等)の場面において、以下に示す①－④が、英語教育で AL 型授業を実践する際の主要課題として浮き彫りとなった。

①学習者の積極的参加をいかに促すか

本調査で最も多く共有された AL の指導上の課題は、学習者の積極的参加をいかに促すかというものだった。英語によるやり取り(ペアワーク・ディスカッション等)の場面における沈黙やフリーライダーの存在に加え、英語による発表活動(スピーチ・プレゼンテーション等)の場面における不参加や学習意欲の低さ等、学習者の消極的な学習姿勢に関する報告が多かった。

②言語活動を通して外化しようとする内容を学習者にいかに深く理解させるか

英語で発表したり書いたりする活動を設けても、そこで発信されるアイディアや意見に新奇性や説得性に欠けるものが多く、結果的に深い議論や発想の共有に発展しないことが多いという懸念も示された。言語活動を通して外化しようとする内容を、学習者にどのように学ばせれば深い学びにつながるのか。活動への従事と学びの深さのバランスに葛藤を抱える教員の現状が明らかとなった。

③目的・状況に応じた英語表現をいかに身につけさせるか

主にスピーキングやライティングを伴う活動で、目的・状況に応じた英語表現を使えていない学習者がいるケースも多く報告された。英語で意見を伝える発表活動の場面において、辞書や機械翻訳が提示する不自然な表現をそのまま用いたり、レポート等のライティング課題において話し言葉を使用したりする等、様々な場面で指導の難しさが見受けられた。

④学習プロセス及び成果をいかに評価するか

発表やレポート課題等、スピーキングやライティングを伴う活動において、学習者が各学習目標を最終的にどの程度達成したかを、客観的に判断・評価することが難しいという意見も多く出た。また、学習者が発表やレポートを仕上げるまでの過程において、教員及び学習者間のフィードバックをどのように授業に取り入れるべきかについて、悩みを抱える教員も多かった。

(2)上記(1)で示した AL 実践に伴う問題①－④の要因及び指導上の対策・工夫について、両調査の分析から得られた知見を以下に示す。

〔①の要因及び指導上の対策・工夫〕

AL 型英語教育において学習者が消極的な学習姿勢を示す傾向がある要因として、主に二つの可能性が示された。一つは、英語で話したり書いたりする経験値の低さ等が影響して、学習者が活動に「参加することが難しい」と感じる状況が生まれている可能性である。もう一つは、取り組む活動への関心や、グループメンバーとの相性等が影響して、学習者が活動に「参加したくない」と思う状況が生じている可能性である。

そのため①の課題に関しては、学習者が自信を持って「参加できる」また「参加したい」と思える環境作りを授業内外で幅広く行うことが重要だと分かった。学習者が自信を持って活動に「参加できる」と思える環境を作るためには、教員による三つの働きかけが必要だと示された。一つ目は、間違いがあっても英語で意思疎通を図ろうとする姿勢を積極的に褒める等、学習者が自分の英語に自信を持てるような支援を行うことである。二つ目は、毎時間話す活動を設けたり、教員がディスカッションへの取り組み方を実演したりする等、英語での発表ややり取りに慣れさせる取組を実施することである。三つ目は、教室内の机を U 字型のレイアウトにしたり、学習者に馴染みのあるテーマを活動に取り入れたりする等、学習者が活動に参加しやすいと感じられる教室環境や活動を用意することである。

また、自ら「参加したい」と思える環境を作るためには、次に挙げる三つの対策が重要だと分かった。一つ目は、多様な学習者特性を考慮した上で、より多くの学習者が興味を持てる活動をデザインすることである。二つ目は、活動の意義や目的に対する理解不足が原因で参加意欲が低い者もいるため、それらを活動導入時に具体的に説明することである。三つ目は、ペア・グループ内の関係性が参加意欲の低下を引き起こす可能性もあるため、教員が学習者の性格や英語習熟度を把握し、学習者の学習意欲を引き出せるようなペア・グループ作りを考えることである。

〔②の要因及び指導上の対策・工夫〕

発表やライティング等の成果物の質の低さは、取り組むテーマに対する学習者の関心不足及び知識不足に起因する可能性が高いことが示された。英語の授業に限らず、テーマについて関心を持ちもっと学びたいという気持ちが伴わなければ、テーマを深める努力をすることは難しい。また AL では、授業内における知識修得の時間確保が難しい傾向が見受けられるが、活動を通じて外化しようとする知識の修得を十分行わなければ、高次の思考や深い議論を行うことも困難である(松下, 2015)。

こうした要因を踏まえ、②の課題に関しては、指導をする上で二つの対策が重要だと分かった。一つは、取り組むテーマに学習者の関心や認知レベルを反映させ、深く学びたいという気持ちを引き出すことである。もう一つは、反転授業等を活用し、テーマに対する学習者の理解

の深化を促す機会を十分設けることである。動画による講義視聴、テーマに関するリサーチ等、授業外学習を充実させることは、AL 型授業の推進を考える上で今後更に不可欠になると思われる。

〔③の要因及び指導上の対策・工夫〕

目的・状況に応じた英語表現を使えていないという問題は、学習者の英語の基礎力、学習者の多様性、クラス編成に要因があることが分かった。英語の基礎力が定着していない学習者に対しては、目的・状況に応じた英語表現を指導するに至らないケースが多く、またそうした学習者の中には機械翻訳の利用が習慣化している人もおり、適切な指導を施す難しさがあることも示された。加えて、アウトプットできる英語力には個人差があるため一斉指導をすることが難しく、特に大人数クラスでは、個別指導することが時間的に厳しいという現実も明らかとなった。

そのため③の課題に関しては、基礎的な英語力の定着を図ることに加え、二つの対策を行うことが効果的とされた。一つは、学習者間の教え合いを授業に積極的に導入することである。特に大人数クラスにおいては、目的・状況に応じた修得すべき表現を一斉指導した後、個人ワークを課し、合格をもらった学生から他の学生の指導に当たらせる等の取組が効果的とされた。もう一つは、学期初めやライティング課題の導入時に、辞書・機械翻訳の効果的な活用方法について指導をすることである。

〔④の要因及び指導上の対策・工夫〕

学習成果に対する評価の問題は、各クラスのニーズに合った明確な評価基準がないことに起因する可能性が高いと分かった。加えて、グループワークを伴う活動では、グループとして仕上げた成果物が主な評価対象となるため、個々の貢献度を適切に評価することが困難だと示された。学習過程におけるフィードバックの取り入れ方に関しては、担当する学生数の多さを懸念し、フィードバックすることを負担に感じる傾向が教員側に多々見受けられた。一方、他人が書いたものを批判的に読む経験が少ないことが原因で、学習者間のフィードバックを難しく感じる傾向が学生側にあることが示唆された。

そのため④の課題に関しては、四つの対策が効果的だと示された。一つ目は、評価に関する先行研究を参考にしながら、各クラスの学習目標や学習者のニーズに合わせて、学習者の達成度を評価できる指標・基準を作成することである。二つ目は、グループワークを伴う活動で、貢献度シート等を活用し、個々の貢献度を評価するシステムを導入することである。三つ目は、各活動の学習到達目標に焦点を定めた添削をする等、大人数クラスでも対応可能なフィードバックの方法を考えることである。四つ目は、授業内に学習者間フィードバックの機会を豊富に設け、学習者の、他者の視点で物事を見る経験値を上げることである。教員が見本を提示した後、見る項目を絞り、学習者間で相互添削を練習すること等が効果的とされた。

本研究の調査で得られた以上の成果は二つの論文にまとめ、それぞれ国際会議で発表した。具体的には、調査 1 の分析結果の一部を論文にまとめ、平成 30 年 10 月に国際会議で発表、その後プロシーディングスに掲載された。調査 2 の分析結果も同様に論文にまとめ、平成 31 年 1 月に国際会議で発表、後にプロシーディングスに掲載された。

また当初計画していた指導案や動画よりも、本研究の結果をウェブサイトという形で整理する方がより良い教員支援になり得る、という新たな知見が得られたことも、本研究の重要な成

果であった。年度後半の計画変更に伴い時間は限られたが、年度末まで調整を行い、サイト基礎部分まで研究遂行できた。しかしながら教材資料等に改良の余地がありまだ公開には至っていないため、引き続き取り組み次年度以降の公表を目指したい。

＜参考文献＞

松下佳代編著.(2015).『ディープ・アクティブラーニング：大学授業を深化させるために』東京：勁草書房

溝上慎一.(2014).『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東京：東信堂

文部科学省. (2014).「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①Ikoma, M. (2019). How can we encourage students to "interact" and "produce" in English classes?: Voices of Japanese EFL teachers. *The IAFOR International Conference on Education - Hawaii 2019 Official Conference Proceedings*, 査読無, 133-146.

②Ikoma, M. (2018). Challenges associated with the implementation of active learning: A small-scale study of Japanese university EFL teachers. *The Asian Conference on Education 2018: Official Conference Proceedings*, 査読無, 393-410.

〔学会発表〕（計 2 件）

①Ikoma, M. (2019). How can we encourage students to "interact" and "produce" in English classes?: Voices of Japanese EFL teachers. Paper presented at the IAFOR International Conference on Education - Hawaii 2019.

②Ikoma, M. (2018). Challenges associated with the implementation of active learning: A small-scale study of Japanese university EFL teachers. Paper presented at the Tenth Asian Conference on Education 2018.